様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１６日現在

機関番号：22701
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００７　～　２０１０
課題番号：19739335
研究課題名（和文）
「永続的ソジョナー」中国人によるトランスナショナルな社会的統合の研究
研究課題名（英文）　A Study of Transnational Social Integration by Chinese as ‘Permanent Sojourners’ in Japan
研究代表者
坪谷　美欧子（MIOKO TSUBOYA）
横浜市立大学国際総合科学部　准教授
研究者番号：80363795

研究成果の概要（和文）：
本研究は、本研究は、留学を契機として来日する中国人のアイデンティティや日本社会への統合についての考察を通して、日本社会および国際関係の変容を展望したものである。日本国内および中国（黒龍江省、北京市等）において聞き取り調査等を行い、中国人移住者の「国際移民システム」および「永続的ソジョナー」アイデンティティについて、とりわけ近年増加が顕著である①1980 年代以降の出生者および②中国東北部出身者という新たな層の中国人移住者の広がりについて明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study explored identities of Chinese migrants and their integration to Japanese society, in which prospected the transformation of Japanese society and international relations. In this study, interview researches have performed both in Japan and China (Beijing and Heilongjiang Province.), in terms of "international migration system" among Chinese immigrants and their "permanent sojourner" identity. It is clarified that an expanse of the new Chinese immigrant groups in Japan is remarkable: (1) after 80’s young generation, (2) immigrants come from the Northeastern China.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,300,000	0	1,300,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,300,000	600,000	3,900,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学　３８０１
キーワード：(1)　国際移民システム（2）　在日中国人　（3）　アイデンティティ　（4）　永続的ソジョナー　(5) リプリゼンタティブ・エスニシティ（representative ethnicity）　(6)　社会的統合

１．研究開始当初の背景

在日中国人は 1980 年代より増加し始め、2007 年末に韓国・朝鮮の人数を抜き、2009 年末の時点ではおよそ 68 万人と、日本にお

ける最大の外国人集団（全体の 31.1%）となっている。日本国籍や永住資格を持つ者も顕著で、その移民過程はすでに定住段階にあるといえるが、一方でかれらは強い帰国指向を持ち母国とのネットワークも緊密に維持し続けている点が特徴的である。

また中国人の移民プロセスの特徴は、留学・留学から日本企業や研究機関等への就職という長期滞在パターンが成立している点で、他のニューカマー外国人にはみられない、日本の高等教育、社会、経済と深いつながりを持つ集団を形成している。近年では日本国籍や永住資格を持つ中国人も急増する一方で、常に帰国が意識され強いナショナル・アイデンティティを保持している点に研究代表者である坪谷美欧子は以前より注目してきた（坪谷 2002；2006 等）。

２．研究の目的

「留学」という移動行為については、従来の国際労働力移動研究においては移民労働者とはみなされず蓄積もそれほど多くはない。そこで研究代表者は、中国から留学生として入国した長期滞在者を対象に、留学生と移住労働者としての両側面から分析を試みることが重要である。具体的には、「国際移民システム」（Kritz ら）にみる日本留学という移民過程、および「ソジョナー：滞在者(sojourner)」（Siu；Uriely ）アイデンティティの観点から中国人へのアプローチが可能になる。

さらに上記の研究を発展させるため、本研究ではとりわけ、①「国際移民システム」仮説の精緻化、②「永続的ソジョナー中国人」の日本的特質および社会的統合に焦点を絞り、中国人によるトランスナショナルな移民システムの展開とそのインパクトを明確にするために研究の着手に至った。

３．研究の方法

日本国内および中国（黒龍江省、北京市等）において聞き取り調査等を行い、中国人移住者の「国際移民システム」および「永続的ソジョナー」アイデンティティについて、とりわけ近年増加が顕著である①80 年代以降の出生者および②中国東北部出身者という新たな層の中国人移住者の広がりについて明らかにした。

まず日本留学から帰国した者やこれから留学を希望している者に対し、留学目的、専門分野、日本語習得、帰国後の予定等について、現地でインタビューを試みた。これと同時に、日本留学にともなう経済的な効果に関する統計的な資料収集なども必要で、中国における政策担当者へのヒアリングも行った。

なお 2009-2010 年度は、中国の黒龍江省社会科学院社会学研究所を拠点に、訪問学者として 2 年間にわかり調査活動を行うことができた。また、留学者の帰国後の就職や起業などの受け入れ優遇政策についても、地方都市で活発になりつつあるという。北京や上海などの大都市に比べていまだ経済的に立ち遅れている面も多い東北地方において、日本留学とその帰国者たちの与えるインパクトについて詳細に調べることができた。

４．研究成果

（1）中国人の「永続的ソジョナー」アイデンティティ

留学を契機として来日する中国人たちは、留学から日本企業や研究機関等への就職という長期滞在パターンが成立している点で、日本の高等教育・経済・社会と深いつながりを持つ集団を形成している。報告者は、かつて留学から就労へ滞在を変化させる滞日中国人について「永続的ソジョナー（permanent sojourner)」と定義することができる（坪谷 2008)。かれらは日本滞在の中で中国人としてのアイデンティティを保ちつつも、日本社会を準拠集団に取りこみ、それにもとづく適応態度と不満感を示すようになっている。この点については、「出稼ぎ」あるいは「ソジョナー（滞在者：sojourner)」

と「定住者（settler)」の中間的な存在である「永続的ソジョナー（permanent sojourner)」という概念を用いて、中国人のアイデンティフィケーションに迫ることが可能となる。

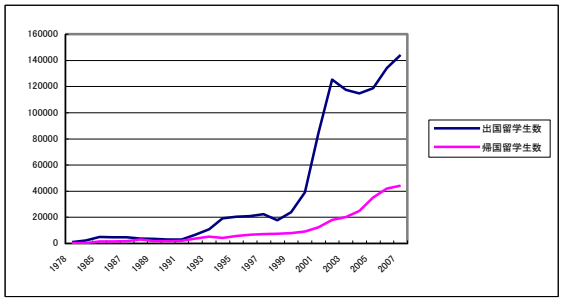
（2）国際的な人材獲得と「留学生 30 万人計画」――中国人留学生をめぐって

中国から海外への留学者全体をみると、近年では帰国人数も増加を見せているものの、2000 年以降の出国留学生数の伸びが著しい（図 1)。一方、日本に滞在する中国人は 80 年代より増加し始め、2007 年末に韓国・朝鮮の人数を抜いた後、2008 年末の時点でおよそ 65 万人と日本における最大の外国人集団である（図 2)。

では、中国人留学生をめぐる日中両国における近年の政策はどうだろうか。2006 年 11 月に中国の人事部発布の「国民経済和社会発展第十一个五年規劃綱要」では、「第 11 次 5 ヵ年計画」（2006 年～10 年）の精神に則り、1992 年の鄧小平の南巡講話で出された「支持留学、鼓励回国、来去自由」（留学の支持、帰国の促進、往来の自由）に加え、「開拓留学渠道、吸引人才回国、支持創新創業、鼓励為国服務」（留学ルートの開拓、人材の吸引、起業のサポート、国家貢献の奨励）という新たなスローガンが打ち出された（中華人民共和国人力資源和社会保障部 2006)。当期間中に帰国留学生を 15-20 万人にすると計画され、起業パークも 150 箇所に、政府関連のパークは 40-50 箇所に増やす計画である。とりわけ重点的なニーズがある専門分野としては、エネルギー、水利・鉱山資源、環境、農業、バイオ、新素材などで、文系では金融、法律、貿易などの高レベルの経営管理人材などと、以前に比べその対象が具体的に絞られている。

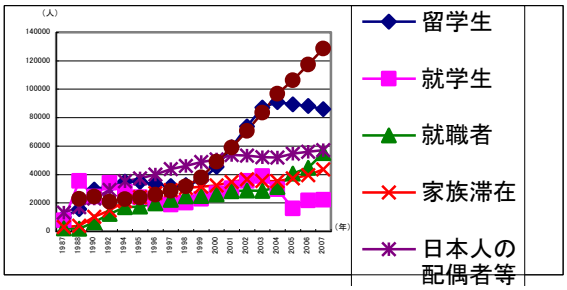
一方日本においては 2008 年に、文部科学大臣の最高諮問機関である中央教育審議会により「留学生 30 万人計画」が打ち出され、2020 年をめどに 30 万人の留学生受入が目指されている（文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省･経済産業省･国土交通省 2008)。計画の中には大学院等への優秀な人材の確保、卒業後の日本企業等への就職支援が設定されており、日本の「グローバル化戦略」の一環として位置づけられている。とりわけ「優秀な留学生を積極的に獲得すること」が強調されており、「10 万人計画」にあった単なる留学生の量的な受入拡大から、確実に人材獲得の意図を持った政策へと変更されている点が興味深い。

図1　中国における出国･帰国留学生数の推移（1978－2007年）



出所：中華人民共和国国家統計局（2009）

図２　在留資格別在日中国人の推移



出所：法務省入国管理局『在留外国人統計』（各年版）

（３）新たな層の出現――留学の普及のなかで

①東北三省からの来日者の増加

現在の中国では、教育の市場化や留学産業の拡大により留学自体が一般化し、旅行も含めると海外への移動がさまざまな層に浸透しつつあり、新たな層の中国人留学生の広がりが目立っている。

②中国東北部からの中国人移住者の増加

日中国交回復および改革開放以降は、北京や上海のような都市部および沿海部からの留学生や就学生を中心に中国人が増加したが、2000 年頃からは、東北三省（黒龍江・遼寧・吉林）からの来日人数も顕著に伸びていることがわかる。現在では東北三省の出身者で在日中国人の３割以上を占められている。朝鮮族、ＩＴ産業及びコールセンターなど外部業務委託関連の日系企業の進出など、日本語人材をめぐる環境としては中国の他地域とは大きく異なっており、東北部からの移民送り出しのプロセスと、それによる家族や地元へインパクトも看過できない。東北部においては、移民送出に必要な斡旋業者や親族ネットワーク、また日本からの送金、親族の扶養など家族や世帯レベルでのネットワーク、地元への投資や起業等、日本への移住をめぐってトランスナショナルな社会空間が形成されている。

②「一人っ子政策」実施以降に生まれた世代にとっての渡日・滞日の意味づけ

「一人っ子政策」以降に生まれた若者に関しては、中国ではやや差別的に「80 後」「90 後」などと呼ばれているが、中国の大学教育の急速な拡大により就職難が深刻となり、代替的に海外留学を選択する現象が見受けられる。

それまでの世代とは価値観や行動様式に大きな違いを持つ中国人留学生の出現が明らかである。またこの世代は、「富二代」ともよばれる世代でもある。近年では日本にいる中国人留学生も学業とアルバイトに悩む「苦学生」というイメージから、母国での激烈な大学受験を避ける形で留学を目指す若者や富裕層の留学も目立つ。

さらにかれらは西欧や先進国へのコンプレックスがより薄れ、強い自信ややや形式的な愛国心を持ちながら海外に留まっていることが顕著である。

(4) 日本留学に求めるものの変化

ここで注目したいのは、特にこうした若者たちにとっての留学の意味や、移動による社会や国家への帰属意識の変容である。「集合的な記憶」という意味では、文化大革命など中国の厳しい時代の記憶を共有していない世代でもある。またかれらの日本への関心も多様化しており、日本の経済・経営や先進的な科学技術だけでなく、漫画、アニメ、ゲーム開発、デザイン、美容、菓子製造などへの関心も高い。1980－90年代に来日した留学生は中国政府からの派遣で突然日本行きが決まったり、英語圏への留学手続きがうまくいかず私費で日本留学を選ぶことが多かった。また大戦中日本軍による被害を受けた親族からの批判や友人・同僚らからの羨望とがないまぜになった反応に直面し、日本留学に対してためらいや複雑な感情が含まれていた（坪谷2008）。しかし、現代の若者にとっての日本留学は、ごく自然なこととしてとらえられており、具体的かつ直接的に日本を指向し、以前と比べより個人に還元された留学行為といえるだろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
坪谷美欧子、「永続的ソジョナー」としての中国人留学生――1980 年代の「留学ブーム」から新世代の出現へ――『中国 21』第 33 号「特集：特集：留学という文化」、2010 年、愛知大学現代中国学会, 東方書店（137-154）, 査読無

坪谷美欧子、「高校における外国につながる生徒とその家族への支援――神奈川県立高校の取り組みから――」『滞日外国人における家族危機と子どもの社会化に及ぼすその影響の社会学的研究』（平成 19-21 年度科学研究費補助金基盤研究Ｂ（1）研究成果報告書　研究代表者宮島喬）, pp. 123-136. ,査読無

坪谷美欧子、外国につながる高校生の抱える課題とそのサポート――神奈川県立高校における多文化教育コーディネーター事業の事例から―『横浜市立大学論叢社会科学系列』第 60 巻第 2 号 2009 年、pp. 277-299. 査読無

〔学会発表〕（計 3 件）
坪谷美欧子、中国社会学会 2010 年年大会（2010 年 7 月 25 日、於：中国黒龍江省社会科学院）フォーラム 1：城郷統籌背景下中国農村社会問題研究「中国和日本農民工的比較研究」

坪谷美欧子、第三回北東アジア区域協力発展フォーラム（2010 年 6 月 16 日、於：中国黒龍江省社会科学院）「80 年代的“留学熱”催生新生代――中国東北三省出身和“80 後”及“90 後”眼中的日本留学――」

坪谷美欧子、「透視中国東北地区向日本的移居現象及意義――兼談東北亜地区社会学視角的重用性――」第二回北東アジア区域協力発展フォーラム、2009 年 6 月 15 日、於：中国黒龍江省社会科学院

〔図書〕（計５件）
坪谷美欧子、「滞日中国人による「永続的ソジョナー」アイデンティティの形成――トランスナショナルな移動者としての中国人留学生――」永野武編『チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ』明石書店、2010 年、pp. 149-172.

坪谷美欧子、『「永続的ソジョナー」中国人のアイデンティティ―中国からの日本留学にみる国際移民システム』有信堂、2008 年、p. 259.

坪谷美欧子、「滞日中国人家族とジェンダー意識の変容――トランスナショナルな就労・育児・介護の経験から――」小玉亮子編『現在と性をめぐる 9 つの試論―言語・社会・文学からのアプローチ』春風社、2007 年、pp. 64－94.

坪谷美欧子、「〈永続的ソジョナー〉という生き方――滞日中国人の帰国の〈成功〉と〈中国人性〉へのまなざし――」佐久間 孝正，林 倬史，郭 洋春 編著『移動するアジア―経済・開発・文化・ジェンダー 』明石書店 、2007 年、pp. 138－169.

坪谷美欧子、「中国人の日本留学にみる〈国際移民システム〉――中国人移住者の〈永続的ソジョナー〉アイデンティティのゆくえ」『平和・コミュニティ研究』第 3 巻（共生社会への課題）、立教大学平和コミュニティ研究機構編、pp. 104-112

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
坪谷　美欧子（TSUBOYA MIOKO）
横浜市立大学国際総合科学部　准教授
研究者番号：80363795

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：